

# ◆◆◆ 特集② 閉村式（本川村） ◆◆◆

## 115年の歴史ある「本川村」、新しく「いの町」へ

9月23日（木）秋分の日、本川村プラチナ交流センターで、130人の方が出席して、本川村閉村記念式典が行われました。

まず、全員が起立して「緑かがやく山並みの、ふところ深く抱かれて」と村歌を合唱しました。「あの時、今までのことが想い出されて、口ずさむうちに思わず胸が熱くなりました。」と語った村民の方もいらつしやいました。席上、山中安夫村長は、「村政



を振り返ると、先人たちがこの地を愛し、地域の繁栄を願ったことや、今日の発展のために注がれた情熱と先見性・政治姿勢の豊かさは敬服の他ならない。しかし、国の行財政改革による交付税の削減により、本川村のような小規模な町村は、地域振興推進計画もその成果を見る事なく頓挫する恐れがあり、厳しい現実に立たされている。そうした時代の流れの中で市町村合併は、

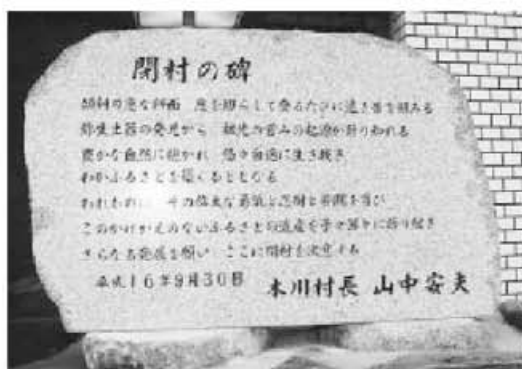
地方分権時代を生き抜く一つの手段であるが、これからも財政状況の厳しさを認識し、基盤産業の農林業振興や観光振興においても埋もれた資源の発掘など、地域おこしを図り、将来に展望のある自立自活の推進を図ることが急務である。」と述べ、新しい町の発展と新しい町となる住民のご多幸を祈念しました。

伊野町長から、「本川村」がなくなるということは大変複雑な思いであろうと察する。



また、「いの町」になることに期待と不安が多くあるだろうが、決して本川地区を見捨てるようなことはあつてはならない。村歌のフレーズに「本川のしあわせと未来（あした）の夢を目指しつつ、こころ寄せ合い励もうよ。」とあるようにとともに「いの町」として手を取り合い「頑張ろう」といった言葉を寄せていただきました。

また、昭和51年に撮影されたビデオ「わが心のふるさと」が上映されました。会場の中には、若かりし日の姿が映し出された人もあり、懐かしさと和やかな横顔で、誰もがスクリーンを見つめていました。村旗を降納する老人クラブ



代表の後ろ姿には、言い表せないほどの本川への想いが感じられて、思わず目頭が熱くなった村民の方も少なくはありませんでした。

続いて、婦人会代表から大きな村木（コウヤマキ）を、中学生代表から村花（シヤクナゲ）を、小学生代表から、村の鳥（コマドリ）の写ったパネルをそれぞれ山中村長に手渡されました。

そして、庁舎玄関の横に建てられた「閉村の碑」の除幕が行われました。

その後、小松保喜吾北村長による、いの町の発展と新町民結束への発声により、和やかな雰囲気の中で「未来に向けての誓い」が催されました。